

支える

「障害のある人もない人も一緒に仕事をし
て『お疲れ様！』と乾杯し合えるような社会が
理想。『福祉起業家』をたくさん養成したい。」

福祉起業で収入アップ

障害があっても働ける社
会を目指し、国も自治体も
様々な取り組みを展開して
いる。だが、民間企業に常
用雇用されている障害者は
全国で約50万人。15、64歳
の在宅障害者の15%程度
だ。

「働く場が少ないのなら
自分で作ってしまおう」と
いう意欲のある人を「福祉
起業家」と名付け、支援を
する株式会社を設立した。

昨年始めた「福祉起業家
経営塾」は、20万円を超え
る受講料にもかかわらず、
障害者本人や家族、福祉施
設の職員など22人が受講し
た。「どれだけ人が集まる
か心配だったが、弊社の理
念に共感する人は少なくな
いと実感しました」

月数回のペースで計11
回、経営戦略や資金計画な
どを学習。事業を起すこと
先登の事例発表も聞いた。
最後に「泊？日の合宿で、
経営コンサルタンの個別
指導を受けながら起業計画

経営の視点から障害者の働く場づくりを支援

おつか ゆきこ
大塚 由紀子さん

(「福祉ベンチャーパートナーズ」代表)



「パッケージの大きさやデザインも工夫が必要で
す」。授産施設の職員らを対象に開かれた「売れ
るクッキー講座」で、参加者にアドバイスする大
塚さん(右) (東京・品川区で)＝川口敏彦撮影

を練り上げ発表し合った。
来月には2期目も開講す
る。

大学卒業後、コンサルタ
ントとして資産運用や企業
経営の相談に乗ってきた。
2000年3月、ヤマト運
輸の関連団体「ヤマト福祉

財団」から、障害者の作業
所を対象とした経営力向上
セミナーの講師を依頼され
た。

作業所は、障害者が企業
への就職や自立能力の向上
を目指す。様々な作業を行
う福祉施設だが、「サキョ
ウシヨって何？といひんら
い無縁の世界でした。」

首都圏で、数か所を見学
して回った。クッキーの製
造販売を行っている作業所
では、無添加の材料にた
わり、最高級のバターを使
って作っているのに、パッ
ケージに何も書いていな
い。商品を買う人が自分で

食べるためなのか、贈り物
なのかということも考えず
に、漫然とパサパサ売って
いる。「これでは売れるは
ずがない」と感じた。

「一生懸命働いているの
に、月給が数千円から一万
円前後と聞いて、日本の話
とは思えなかった。経営の
視座を持ち込めば5万円、
最低でも3万円は払える。」

そう思い、講師を引き受け
た。

「パンを売るなら、店舗
内だけでなく、大学や企業
へも出張する。男性にはカ
ツサンド、女性には小さめ
の菓子パン……と品ぞろえ

を考える」。民間の会社な
ら当たり前の企画・販売戦
略、接客・営業のマナー、
商品開発などを、3年間、
各地の作業所で伝えた。

「みんな真剣に聞いてく
れる。福祉の世界に奮闘追
求の考え方を打ち込むこと
は間違っていないと感じ、
ビジネスにしようと思った。

03年6月、都内に会社を設
立し、福祉施設職員などを
対象にした「経営スキルア
ップコース」を始めた。

だが、福祉の世界に経営
感覚を根付かせるのは容易

ではない。賞金アップの計
画書の作成を求めると、「こ
りあえず作ってみました」
と言っ施設職員が多い。「重
い障害者が多い」「職員数
が少ない」との言い訳を数
多く聞いた。「民間企業な
ら当たり前」「身を削っ
て必死でやる」という熱意
がまだ足りない」

それでも、ある知的障害
者授産施設で、賞金を月8
000円から5万円にアッ
プさせた。採資性の悪い作
業をやめてパンの製造販売
に絞ったのが功を奏した。

起業家経営塾の卒業生も今
秋、精神障害者を雇い、新
鮮な野菜のジュースやスー
プを出す「野菜カフェ」を
都内にオープンする。

「障害者の働く場が街の
あちこちにできれば、世の
中の見方も変わるはず。
『障害者は戦力になる』、
頑張れば利益も上げられる
』という状況が確立され
れば、雇用の機会も収入も
増えるのではないでしょ
うか」

(安田武晴)

障害者の作業所と授産施設
作業所は、障害者の家族などが
自主的に設立・運営する施設。全国
に6000か所、利用者は9万人。授産
施設は、法律に定められた施設で、
全国に2800か所、利用者は9万4000
人。いずれも作業内容は、クッキー
やパン、リサイクル商品の製造販売、
飲食店経営など多岐にわたる。